

子供の教育

— Childhood Education —
Journal of the Association
for Childhood Education

一九六八年三月号は「教育者としての親」と題する特集号である。ミール・ポニーは巻頭論文「親と教師は互に学ばなければならぬ」の中で、親と教師とは子どもの幸せのために有効な働きをする人物であることをもってお互に認識し合うなら、さらに

教育的関係を促進できるにちがいないという立場から、親の教師に対する期待と教育関係を支える原理について論じている。

親は、教師が子どもの知的達成ばかりでなく、子どもの全人的な成長にも関心をよせ、子どもに公平で暖かいそして敏感な反応を示してくれる人であることを願っている。そして、良い教師は、子どもをある段階で足ぶみさせることなく、子どもの可能性を実現するために、あらゆるものに挑戦して適切な刺激を与えるはずであると思っ
ているし、また良い学校とは、時計を見ながらあるいは、人格を無視した教育をするところではなく、むしろ予定しなかったものを取り入れ、人間関係を大切にし、さらにユーモアや人間的な誤ちに対する寛大さや個人の特性を受け入れることによって「組織に裂け目」をつけるものであると考えている。

一方、貧困家庭や少数民族の家族の親は、文化水準の差について教師がどの程度の知識をもっているかということに強い関心が

ある。このような家庭の子どもの多くは、教育を受けることにより家族や仲間たちと異なる行動や思想に順応しなければならぬからである。しかし、教師が、知的な面にも人生観にも影響を与える文化差をよく理解するならば、親と協力して子どもの教育に当たることができであろう。教育という事業に、親と教師が手を携えて臨むためには、ポスターを上手に作ったり、会議の進め方や質問の仕方工夫をこらすよりも、思いやりと尊敬の気持をお互の間で確立することが先決であるとポ氏は結んでいる。

次に、長年にわたって親と教師との教育的関係のあり方の研究と実践を重ねてきた二つの学校の例を見てみよう。

その一つは、ホールの「親は教育者である」という論文に紹介されている、マウリー・スクールの事例である。同校では、親の潜在力は学校の力動的で貴重な財産であるという立場から、親と教師とがヒューマニズムの愛の精神のもとに次のような実践

をつみかさねてきた。

●学校に対する第一印象を大切にす。

入学の受付の時に、その学校に対する第一印象が決るのだから、この時から親と信頼関係ができるよう配慮することは、その後協力体制に大きな影響を与える。

●校長室を解放する。学校の手伝いや行事の打合わせなどに、自由に校長室を使用することにより、たえず親同士または教師と顔を合わせることができ好ましい感情を育てることになる。

●会合と家庭訪問。同校では木曜日の夜を定期的な父兄会に当て、すでに長い伝統をもっている。ここでは、子どもの発達状態や問題の解決策について個人的に話し合うのである。また、家庭訪問で子どもたちから歓迎されると子どもを正しく認識しなければという意欲がわいてくるものである。

●学校行事に参加する。カーニバルには地域ぐるみで、クリスマスや遠足には家族ぐるみで参加し楽しいひとときをすごしてきた。その他、図書の仕事や子どもの歌や

ダンスにピアノの伴奏をつける仕事、あるいは同じ町の中でまだ子どもたちが行ったことのない所へ案内するという活動を通して、親は学校生活の中で立派に教育者の役目を果たしてきたと報告している。

ニールセンの「親はプログラムを豊かにする」という論文では、ボウイ地区の事例を基に、親の教育的役割をさらにすすめ、保育計画の発展や展開に寄与する助力者として扱っている。しかし、ニ氏は「親が教授の分野にまで足を入れるべきであると考えている訳ではない。親と協力することが、生産的で建設的なものであるならこれらを統合すればプログラムを豊かにすることができにちがいない」と強調するのである。ピ学区の幼稚園では、毎週水曜の午前中は保育に必要な教材(本のカバー、人形の着物、ゲーム等)を親が作る日になっている。

教師の側で作って欲しいもののある場合は、予めサンプルと材料を用意しておき、朝親が来るとすぐに仕事にとりかかれる状

態にしておく、今まで、主に言語領域の教材——子どもの作ったお話を編集し、テープに打って装丁し図書の一部に加える——を作ってきたが、中でも子どもたちの人気を集めたものは「白紙の本」である。これは、本の型やさし絵からお話を連想させて空白の部分に物語を書きこむというものである。

教材の準備の他に、親が幼稚園プログラムに直接参加するものもある。親の趣味や特技を子どもたちの前で披露する活動がそれである。例えば、旅行好きな親は、さまざまな旅の話やその土地のめずらしい物を見せてあげたり、ベットの動物を幼稚園へつれて来て飼い方を実際、教えるのである。このような親の隠れた潜在力を活用するならば、子どもたちは本を読んだり、写真を見る以上の直接経験をすることができるのである。親は、もはや保育プログラムの単なる附属物以上の重要な要素を占めていることを認めなければならないのではないか。この号には、特集とは別にローレンス・

フランクが「あそびは有効である」という論文を寄せている。この論文は、あそびの価値についての立場を表明したものである。幼児教育界における今日の課題を知る上に参考となろう。

この論文のねらいは、あそびにあまり価値を見出せない人たちが子どもに関心や活動を知的な学習に向けようとする人々を説得するところにある。人間は、人生の最初の五、六年のうちから、まわりの自然や人間の世界をのり越えていかなければならない。まわりの世界を、それこそ手さぐりで探していくうちに触れたもの名前や意味を学習するのである。そして、そのするどい感覚能力は、見つめるだけの目を洞察する目に、物音を聞くだけの耳を傾けて聞く耳に、触れたものをさわるだけだった手を感じにぎりしめる手に変えるのである。

教授のためのプログラムやおとなの考える教育に、このような偉大な学習を含めることができるだろうか。多分、不可能である。

ろう。しかし、正常な発達をしている子どもなら、継続的なあそびを通してこのような経験をマスターすることができるのである。そればかりではない。あそびに夢中になつていく間に、自己を知る機会を自発的に発見するのである。

子どもは、*「あたかも〇〇のような世界」*の中で想像的にこの世界を解放しながら、自分に期待されているさまざまな事柄を彼なりに翻訳して自らの生活空間を作るのである。それぞれの人間が自らの生活空間を再構成する時に、人間は公的な世界の中で独自の生活を展開することが可能となるのである。このような意味からも、あそびは発達上きわめて重要な役割をもっているといえるのである。

あそびはまた「思考経験」とも深い関係をもつ。芸術や科学における最も新鮮な考えは、新しいそして未知の可能性に向かって自由に考える人々によつてもたらされたものであり、その創造的な思考や想像性

は子ども時代から保持されてきたものであるといわれている。子どもが、好奇心や探究心をあそびや芸術活動に表現する様子は、まさに「思考経験」の原型である。幼児期に、十分あそぶ機会が与えられるなら、個性のある知的学習や訓練に打ちこむことができるはずである。

オットー・ランクはかつて「あらゆる世代は、自分たちのために子どもを使つてきた」と述べたが、今日の子どもたちの知的圧力をみていると、近代人の自己敗北の肩代わりを、子どもたちにおしつけているような気がしてならない。確かに、このような圧力のおかげで、会社や工場へよく訓練された有能な人物を送ることができたが、同時に人間の要求や感情を無視した無感動な人間や欲求不満の人間を大ぜい作つてきたことも事実である。

学校は、もつとあそびのために時間をさき、子どもという一個の独立した人間が、自らの力で学習する機会を保障する必要がある。(〇)